

学習支援校の先生方からの寄稿

『今日の先生方は、僕らと
同じ小学生やってんなあ』
なぎさ小学校 縣 智佳子

「このお話してくださるの、本当はつらいんだと思いました。」
「あの踊りは、見ているだけで、なんだか気持ちがやさしくなれました。」

これは、昨年戦争体験のお話を聞かせていただいた後に書いた児童の感想文にあったことばです

本校の6年生は、世界の中の日本、「平和のとりでを築こう」ということで、総合学習の中で平和学習に取り組んでいます。その取り組みの一つとして修学旅行では広島に行き、原爆ドームや平和記念資料館の見学をしています。ただその戦争の傷跡が「昔のこと」「遠いところで起きたこと」にならないよう、神戸に住む戦争体験者の方々のお話として、毎年、グループわのみなさんに実体験のお話を聞かせていただいています。

昨年は、「神戸大空襲」「京都の建物の疎開」「異国の地で体験した戦争」についてお話をいただきました。自分のおじいちゃんやおばあちゃんと同じ年ぐらいの講師の先生方のお話には、いつもは落ち着きのない子供たちが、先生方を見つめ、食い入るように話を聞いていた姿を思い出します。疎開中、逃げる自分たちの体のそばに焼夷弾が落とされたことや、ハワイという異国の地でも戦争の苦しみを味わったお話は、子どもたちの心の奥に届き、そんな時代でも強い意志をもって「生きよう」とされた方々がいるからこそ、今の自分たちがあるという感想を持った子もいました。戦争体験の「生の声」を聞かせていただいたことは、その後の学習への意欲につながりました。

学習指導補助をしていただいて
木津小学校 今井 啓裕

私が、木津小学校に転任した年に学習補助をしていただくお二人の方に初めてお会いした。当初、時間の割り振りや連絡を担当した私は、お二人の都合のよい日に月3～4日、1日3時間の補助をお願いした。補助内容は、算数のプリント学習を軸にして、一斉指導後の練習問題のチェックをお願いしたり、九九を聞いていただいたりした。何度か来ていただくうちに学習の流れにも慣れられたのか、一斉指導の時は、気になる児童の近くにおいて、対応していただくようになってきた。それから、2年、3年と続いていくうちに学校のニーズが広がり、学習指導補助内容が、1,2年の子供たちの活動全般に広がっていった。

以前に補助していただく内容が変わったので、了解を得るために電話をさせていただいた時のこと、「いいですよ。」の快い返事があった。学習活動は、その時に応じて、お願いしたことが変化することがある。その要望にこたえていただけることに感謝している。ボランティア活動は、こうしないといけないとか、こうあるべきだという思いにとらわれすぎるとお互いに窮屈なものになってしまう。基本的なことは、決めていても肩張らずにその時に応じた活動を進めていくことが大切であると思う。

授業中に印象に残った光景がある。一斉指導が終わり、プリント学習した後チェックする時にボランティアの方の前には、長蛇の列、担任の前には、誰一人いない。子ども達はいろいろな方とのかかわりの中で学習していくことを望んでいると感じた。ボランティアの方にチェックしてもらいたい...そんなヒトコマであった。また、毎年、私が「来年もお願いします」

と声をかけると「『もう、来年は、いいですよ』と断られるかなと思っていました」という返事が返ってくる。私は、木津の子供たち全員にかかわって頂き、子どもたち全員がボランティアの方を知っているような関係作りが大切であると思っている。ボランティアは、継続していただくことが大変ありがたい。「来年も、再来年も。どうぞ、お手伝い下さい。よろしくおねがいします」

読み聞かせ

櫛谷小学校 榎原 恭子

櫛谷小学校では、学期毎に2～3週間、朝の15分間ほど、「おはよう読書」を行っている。チャレンジタイムで本校に来て下さっている仲井先生と堺先生が読み聞かせをされていることをお聞きして、昨年度来ていただいた。他校では、地域に読み聞かせのグループがあり、その方たちがされていると聞くが、本校にはそのグループがないので、仲井先生や堺先生に出会えたのはとてもありがたかった。

読み聞かせをしていただいている時の子どもたちは、先生の声に熱心に耳を傾け、お話の中に引き込まれていた。その後図書室で同じ本を見つけると、「これ、読んでもらった本だよ。」と言いながら、話の内容を知っているにもかかわらず、また最初からその本をめくっていた。きっと、いつまでも心に残る一冊になるだろう。今年度もまた来ていただけることになり、子どもたちも担任もとても楽しみにしている。

